
SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No.135 November 2013

共同利用・共同研究拠点中間評価で最高のS評価を受ける

国立大学における共同利用・共同研究拠点の最初の認定期間が4年目に入った2013年度、科学技術・学術審議会の中に設けられた作業部会により、全国74拠点の中間評価がおこなわれました。その結果が8月27日に公表され、スラブ研究センター（「スラブ・ユーラシア地域研究にかかわる拠点」）は最高のS評価を受けました。評価の内容は以下の通りです。

評価区分

S：拠点としての活動が活発におこなわれており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献が多大であると判断される。

評価コメント

共同利用・共同研究拠点として、著名研究者から若手研究者に至るまで幅広い研究者が参加し、優れた研究成果を上げるとともに、当該分野の学界の世界的統合を目指し、優れた研究者がリーダーとなって国際的な研究活動を展開している点が高く評価できる。

今後、スラブ・ユーラシアという広範な地域研究の推進に向けて、コミュニティを一層拡大することが期待される。

このような高い評価を受けることができたのは、全国・世界の関連研究者コミュニティのご支援の賜物であり、また、研究者コミュニティへの奉仕を常に考えながら研究・教育活動やその支援に従事しているセンターの全スタッフの努力の成果だと考えています。関係者の皆様に深くお礼申し上げます。センターとしては、この評価を励みに、スラブ・ユーラシア研究のさらなる発展に貢献していきたいと考えています。

共同利用・共同研究拠点の中間評価について詳しくは、文部科学省のウェブサイト (http://www.mext.go.jp/a_menu/kyoten/1338980.htm) をご覧ください。[宇山]

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」、 地域研究コンソーシアム研究企画賞を受賞

2008～2012年度新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（領域代表者 田畑伸一郎）は、第3回（2013年度）地域研究コンソーシアム研究企画賞を受賞しました。地域研究コンソーシアムは、世界諸地域の研究に関わる研究組織、教育組織、学会などをつないで、情報交換や研究活動を進めるネットワーク組織で、スラブ研究センターもその活動に積極的に参加しています (<http://www.jcas.jp/>)。審査委員会の講評のなかでは、「現代において経済的なプレゼンスを高めるロシア、中



コンソーシアム宮崎会長から表彰を受ける筆者



受賞記念スピーチで比較地域大国論を講じる筆者
 ことが高く評価されました。異なる地域研究者コミュニティを結び付けるような我々の研究活動が、地域研究者によって評価されたことは大変喜ばしいことです。[田畑]

国、インドを地域大国として位置付けて比較することによって、地域の特殊性や固有性を見いだすことを得意とする地域研究者が、敢えてそれらの国々が持つ一般性・普遍性の解明に挑み、中軸国（先進国）認識とならぶ新たな基軸としての経済・政治モデルの提示を試みている点は、日本における世界認識を拡大し、大きく転換する上でインパクトを持ち得ている」



グローバルCOE

◆ GCOE・JIBSN 五島セミナー ◆



セミナーの様子

第1部の漁業問題では、「環りの海」企画で新聞協会賞を受賞したばかりの田中輝美記者（山陰中央新報）による日韓暫定水域に関わる報告を皮切りに、与那国と五島の漁協組合長が日台と日中の漁業協定の問題点をそれぞれ指摘しました。

第2部の国境振興問題では、JIBSN代表を務める対馬市長が存在感を示し、九州経済調査協会からは、ANAとJR九州ビートルのタイアップによる、上対馬と釜山

2013年10月13日、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」と境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) が主催するJIBSN 五島セミナーが開催されました。これは2011年に設立されたJIBSNが、2012年の稚内・サハリンセミナーに次いで組織した、2回目の境界地域イベントです。稚内・根室から竹富・与那国に至る自治体・研究機関・ビジネス界の諸メンバーに加え、30人弱の地元市民も参加し、60名程度の規模の催しとなりました。



上陸のしよう

を結ぶ新しい観光商品の開発にむけた取り組みについて報告がなされました。境界地域の現場における実践を比較するという、今回の新しい試みは、境界問題に取り組む実務と研究をつなぐ意義を多くの参加者に確認させたようです。なお来年は竹富町・波照間島での開催が予定されています。

JIBSN 恒例のフィールドワークとしては、翌 14 日に、男女群島ならびに（肥前）鳥島の視察が計画されました。このツアーは天候上の都合で 3 回に 1 度程度しか成功しないといわれるものですが、今回は素晴らしい天気と風のもと、30 名の

参加者全員が男女群島の上陸に成功しました。また帰路は、韓国がこれを島と認めないため、日韓暫定水域をつくらざるをえなくなった（肥前）鳥島も視察しました。チャーター船上から、鳥島を使って経済生活を営む漁船を確認することもでき、これが国際法上、確固たる島であることを一同で確認しました。

今回のイベントを大成功に組織した五島市のスタッフのみなさまに心よりお礼申し上げます。[岩下]



鳥島

◆ Eurasia Border Review 発行される ◆

GCOE「境界研究の拠点形成」が編集する査読英字誌 *Eurasia Border Review* Vol. 4, No. 2 が 2013 年秋に発行されました。HP からダウンロードして読むことができます。[岩下・藤森]

研究の最前線

◆ 2013 年度冬期国際シンポジウム開催予定 ◆

今年 12 月におこなわれる予定の冬期国際シンポジウムのプログラムがほぼ確定しましたので、お知らせします。[家田]

Catastrophe and Resurrection: New Approaches to a Changing Slavic Eurasia

災難と再生：変動するスラブ・ユーラシアへの新しい研究視角

2013 年 12 月 12 日（木）～ 14 日（土） 使用言語：英語・ロシア語

2013 年 12 月 12 日（木）

Opening Session 9:30

宇山智彦（スラブ研究センター長）「開会の辞」；家田修（SRC）「シンポジウムの説明」

Session 1 9:45-11:45 「ロシア帝国におけるムスリム社会の危機と再生」

司会：宇山智彦（SRC）

報告者：

Aftandil Erkinov (Tashkent State Institute of Oriental Studies/SRC) "Islam 'versus' Islam: Process of Turkicization in the Turkestan General- Governorship"

Marsil Farkhshatov (Ufa Scientific Center, Russian Academy of Sciences) "Журналы присутствия Оренбургского магометанского духовного собрания: важнейший источник при изучении духовно-религиозной жизни мусульман Внутренней России XVIII - начала XX в."

討論者：長縄宣博 (SRC)

Session 2 13:00-15:00 「ポスト・ソ連期 20 年の中央アジアにおける体制変動」

司会：田畑伸一郎 (SRC)

報告者：

Bakhtiyor Islamov (Tashkent Branch of Plekhanov Russian Economic Univ./SRC) “The Central Asian States Twenty Years After”

Erlan Karin (Kazakhstan) “Развитие политических систем в Центральной Азии: проблема транзита власти”

Bhavna Dave (SOAS, Univ. of London) “The Changing Multinational State in Kazakhstan”

Discussant：岡奈津子 (ジェトロ・アジア経済研)

Session 3 15:15-17:45 「チェルノブイリ・福島と地域の再生」

司会：家田修 (SRC)

報告者：

Aleksandra Britsyna (Kyiv, Ukraine) “Изучение устной традиционной культуры жителей пострадавших от Чернобыльской катастрофы районов Украинского Полесья и переселенцев”

小澤祥司 (環境ジャーナリスト)

Rostyslav Omeliashko (State Scientific Centre for Cultural Heritage Protection from Technogenic Catastrophes, Ukraine) “Опыт сохранения традиционного культурного наследия Украинского Полесья в зоне Чернобыльской катастрофы”

討論者：塚崎今日子 (札幌大)；浅野豊美 (中京大)

18:30-懇親会 於札幌アスペンホテル

12月13日 (金)

Session 4 9:45-11:45 「国境観光の比較」

司会：岩下明裕 (SRC)

報告者：

Sergey Golunov (Univ. of Tartu, Estonia) “Tourism across the EU-Russian border: Official Strategies vs Unofficial Tactics”

Tomás Cuevas (Autonomous Univ. of Ciudad Juárez, Mexico) “Potential of Cross-border Tourism in the Paso del Norte Region”

田村慶子 (北九州大) “Border Tourism in Southeast Asia: Thailand-Myanmar and Singapore-Malaysia Borders”

討論者：西山徳明 (北大観光学高等研究センター)；高松郷子 (同)

Session 5 13:00-15:00 「ロシアと極東における第二次世界大戦の記憶」

司会：平松潤奈 (金沢大)

報告者：

Serguei Oushakine (Princeton Univ.) “Case of Russia”

Philip Seaton (Hokkaido Univ.) “War Memories in Hokkaido: National vs Local Remembering”

荒井幸康 (亜細亜大) “Case of Mongolia”

討論者：越野剛 (SRC)

Session 6 15:15-17:15 「ロシア・ソ連文化における”よそ者”のイメージ」

司会：望月哲男 (SRC)

報告者：

Konstantin Bogdanov (Institute for Russian Literature, RAS) “Blacks in the Soviet Union: The Ethnography of Imaginary Diaspora”

長谷川章（秋田大）“Images of Extraterrestrials in Soviet Films”
Boris Lanin (Russian Academy of Education) “Jews in Slavic Worlds according to Friedrich Gorenshstein”

討論者：野中進（埼玉大）

12月14日（土）エクスカーション（余市観光）

10:00-12:30 湯浅剛（防衛研究所）「封じ込められた紛争？軍事力の拡散と国際的要因に見るタジキスタン内戦」（北海道中央ユーラシア研究会）

◆ 国際ワークショップ ◆

「ヨーロッパ言語地図の中のスラヴ諸語：地域・類型論の諸問題」の開催

8月11～12日に、上記のワークショップがセンターで開催されました。本ワークショップの目的は、20世紀末から21世紀にかけて、ヨーロッパを言語圏と見る立場であるマーティン・ハスペルマス、ヨハン・ヴァン・デル・アウヴェラらによって展開された、いわゆる「標準的平均的ヨーロッパ語 (SAE=S*standard *A*verage *E*uropean)」研究を批判的に再検討することでした。その主眼は、従来の研究では特に十分に扱われているとは言えないと思われるスラヴ諸語を題材に、地域言語学、言語類型論、社会言語学、歴史言語学といった多角的な視点から論じなおすことに置かれていました。



ヘニング・アンデルセン氏

参加者は6ヵ国から10人と比較的小規模でしたが、その多くは当該分野の世界トップクラスの研究者でした。また各報告の時間は35分と

長めに設定されたこともあり、多彩な内容の報告後の議論も実に白熱したものになりました。本ワークショップの成果は、野町（センター）とアンドレイ・ダニレンコ氏（米国ペース大学）の編集の論文集として、西欧の有力な出版社から刊行する準備が進められています。

本ワークショップの組織にあたり、日本スラヴ学研究会、日本ロシア文学会および同北海道支部から有形無形の支援を受けました。紙面をお借りして、関係者の皆様にお礼申し上げます。プログラムは以下の通りです。[野町]



ワークショップを終えて

8月11日（日）

Plenary Talk

Bernd Heine (U. of Cologne, Germany) “On Formulas of Equivalence in Contact-induced Grammaticalization: An Example from Molise Slavic”

The Balkan Conundrum

Brian Joseph (The Ohio State U., US) “Languages Large and Small, Slavic and Non-Slavic: A Sociolinguistic Typology”

Andriy Danylenko (Pace U., US) and Motoki Nomachi (Hokkaido U., Japan) "Balkanisms, Carpathianisms and Carpathian Balkanisms, or Can we Speak about a Carpathian-Balkan Linguistic Macroarea?"

8月12日(月)

SAE and Smaller Off-springs

Henning Andersen (U. of California in LA, US) "Slavic and the Birth of Standard Average European"

Jadranka Gvozdanović (Heidelberg U., Germany) "Standard Average European Revisited in the Light of Slavic Evidence"

George Thomas (McMaster U., Canada) "Some Typological Features of the Slavic Languages of the Danube Basin from a Pan-European Perspective"

(Areal) Typology Meets History

Björn Wiemer (Johannes Gutenberg U. of Mainz, Germany) "Matrěška" and Types of Areal Clusterings Involving Varieties of Slavic"

Keiko Mitani (The U. of Tokyo, Japan) "Direct Evidentiality and Illocutionary Acts Slavic Evidentiality Viewed from Japanese -gar(u) and -tei(ru)"

Paul Wexler (Tel Aviv U., Israel) "A New Attempt to Reconstruct the Languages of Slavo-Iranian and Slavo-Turkic Tribal Confederations: The View from Yiddish"

◆ ホームカミングデー行事として活動報告会と公開講演会を開催 ◆



家田修教授の講演

北海道大学では2012年から、同窓生による母校訪問・親睦を主旨としつつ広く学内外に開かれた行事として、ホームカミングデーを開催しています。今年は9月28日に開かれ、スラブ研究センターも初めて参加し、活動報告会と講演会をおこないました。

まず第1部の活動報告会では、「スラブ研究センターの最近の研究・教育について」と題して宇山センター長の講演があり、旧ソ連・

東欧諸国を中心にユーラシア全域を視野に入れた比較研究・境界研究の国際的拠点としての、スラブ研究センターの最近の取り組みが紹介されました。

次いで第2部では、昨年から定期的で開催しているスラブ研究センター公開講演会の第6回を兼ねて、「チェルノブイリと福島を地域と世界から考える」と題する家田修教授の講演がおこなわれました。これは、社会的な関心の高い原発・災害問題とスラブ・ユーラシア地域研究の関係を扱うもので、家田氏はチェルノブイリと福島に加え、2010年に起きたハンガリーのアイカ赤泥流出事故問題の事例も比較検討し、安全基準のあり方、避難者の精神的救済、市民防災という観点から論じました。いずれの事例研究も、度重なる念入りな現地調査と学術的な分析に基づき、現地社会への研究成果還元を意識したもので、特に被災者の具体的な声の紹介は、聴講者の関心を引いていました。講演の後は活発な質疑応答がおこなわれ、盛会のうちに終了しました。

全体として42名の参加があり、アンケートでは他学部と同窓生の方から、「今回初めてスラブ研究センターに来て、どんなことをしているのか知ることができ、ありがたい機会となった」とコメントを頂きました。[野町・宇山]

◆ 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会のシンポジウムと会議を開催 ◆

国立大学附置研究所・センター長会議第3部会は、10月4日に、部会の会議および公開シンポジウムを札幌で開催しました。附置研・センター長会議は、全国の国立大学に附置された研究所・センターが相互に連携・協力することにより学術研究の振興に寄与することを目的とする組織で、3つの部会のうち第3部会は、人文・社会科学系の14の研究所・センターで構成されています。今回は、スラブ研究センターが部会長校およびシンポジウム当番機関として企画・運営をおこないました。

当日はまず北海道大学学術交流会館で、シンポジウム「比較研究の愉しみ」を開催しました。第3部会の研究所・センターの活動の中では地域研究が大きな比重を占めていますが、昨年度までの新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」に示されたように、ある地域の個性をより深く理解するためにも、世界全体の構造を把握するためにも、地域間の比較研究が重要であるという認識が近年広まってきています。総合司会の宇山センター長による趣旨説明と、北大の研究担当理事である川端和重副学長による挨拶の後、以下の3つの報告がおこなわれました。

藤原辰史（京都大学人文科学研究所）「第一次世界大戦の共同研究：その比較史的課題」

黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「地域を股にかける人々を比較して：レバノン・シリア移民研究の地平」

田畑伸一郎（北海道大学スラブ研究センター）「ロシアと中国とインドの経済を比較したら何が分かったか？」



川端理事・副学長による挨拶



シンポジウムでの討論の様子

いずれも世界的な視野と地域に密着した知見を兼ね備えた、知的刺激に富む報告でした。討論者は、地域比較研究を多く手がけている京都大学地域研究統合情報センターの林行夫センター長で、昔の比較研究のように各地域の先進性・後進性を強調するのではなく関係性や相同性を発見することの重要性、文理融合だけでなく「文文融合」を進める必要性、比較研究の成果の理論的一般化や社会的公開のあり方などについて、有益なコメントをいただきました。討論者と報告者・司会者との議論も盛り上がり、計63名の参加者は熱心に聞き入っていました。

シンポジウム終了後、札幌アスペンホテルに会場を移して第3部会の会議が開かれました。附置研・センター長会議および部会の運営に関する議題のほか、文部科学省研究振興局学術機関課の木村直樹課長から、国立大学改革の推進や共同利用・共同研究拠点の中間評価結果について説明があり、所長・センター長との間で熱心な議論が交わされました。大学改革の動きが激しくなる中、全国的・世界的な共同研究を先導する研究所・センター間の協力を深

めるため、附置研・センター長会議全体としても活動を活発化させているところです。特に文系の研究所・センターは、人類社会に関する多面的な研究を基礎としながら、国内外での各種政策提言や歴史認識の深化など、日本という国の国際社会における調和と競争力の向上に直結する活動をおこなっており、その意義に対する政府や一般社会の認識を高めるため、第3部会の活動はますます重要になっていくと思われまます。[宇山]

◆ 2013年度公開講座開かれる ◆

今年度のスラブ研究センター公開講座は、「ユーラシアの現代と宗教」と題して、5月13日から6月3日にかけておこなわれました。講師および演題は下記の通りでした。

日 程	講 義 題 目	講 師
第1回 5月13日(月)	メッカへの道：イスラーム大国ロシア	北海道大学スラブ研究センター 准教授 長縄 宣博
第2回 5月17日(金)	現代ロシア若者の宗教事情：正教会を中心に	大阪大学・同志社大学 講 師 有宗 昌子
第3回 5月20日(月)	現代ロシアにおけるユダヤ教の現状	大阪大学大学院文学研究科 助 教 赤尾 光春
第4回 5月24日(金)	伝統宗教か、それとも精神修養の糧か：現代ロシアと仏教	青山学院大学 講 師 荒井 幸康
第5回 5月27日(月)	アルメニア使徒教会とアルメニア、カラバフにおける自治体建設	北海道大学スラブ研究センター 教 授 松里 公孝
第6回 5月31日(金)	現代ロシアの呪術リバイバル	総合地球環境学研究所 研究員 藤原 潤子
第7回 6月3日(月)	拡散するジハード（聖戦）の大義：現代イスラームの動向と南アジア	大阪大学大学院言語文化研究科 教 授 山根 聡

現代社会で宗教が果たしているアクチュアルな役割を観察することを目的とした講座でしたが、80名の受講者を得ることができました。[松里]

◆ アルタイ、ババシヨフ両氏の滞在 ◆



ドンブラの弾き語りをするアルタイ氏（左）とババシヨフ氏（右）

ユーラシア大学のアマンジョル・アルタイ（Аманжол Өлтай）氏およびカラガンダ・ボラシャク大学のアザト・ババシヨフ（Азат Бабашов）氏が、カザフスタン側の資金により、9月25日から10月1日までセンターに滞在しました。9月26日の研究会（「研究会活動」欄参照）では、アルタイ氏が15世紀に遡るカザフの口承文学について、ババシヨフ氏が20世紀初めの民族運動（アラシュ運動）に参加した知識人の文学について報告しました。アルタイ氏はアイトウス（即興詩の掛け合い）で有名なアクン（即興詩人）でもあり、弦楽器のドンブラを手にした弾き語りの実演で、聴衆は大いに盛り上がりました。[宇山]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 134 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。ただし、今号で特に紹介したものは省略します。[大須賀]

- 8月7-9日 第17回一緒に考えましょう講座 市川克樹（株式会社オフィス・ブレン代表）「地産地消の新エネルギー：可能性と問題点」
- 8月14日 黄立菲、朱剑利、王晓菊「中国ではロシア・ソ連史がどのように研究されているか？中国社会科学院世界史研究所の歴史家との対話」（スラブ研究センター特別セミナー）
- 8月19日 T. サンドロヴィチ（京都大・院）「ソ連の日本観に関する一考察：家族イメージを中心に」（鈴木・中村基金奨励研究員研究報告会）
- 8月28日 岩本和久（稚内北星学園大）「オレーシャとスポーツ」（ユーラシア表象研究会）
- 9月2日 岡野要（京都大学・院）「セルビア語とブルガリア語の〈行く〉と〈来る〉：南スラヴ語の移動動詞研究のための予備的考察」（鈴木・中村基金奨励研究員研究報告会）
- 9月3日 オンコサーミア研究セミナー S. アンドラーシュ（聖イシュトヴァーン大、ハンガリー）「腫瘍温熱療法オンコサーミアについて」 司会兼通訳：盛田常夫（立山R&Dヨーロッパ社社長）
- 大石侑香（首都大学東京・院）「西シベリア・タイガ地帯の原油開発とトナカイ飼育民社会」（北海道中央ユーラシア研究会）
- 9月9日 大石侑香（首都大学東京・院）「職業牧夫から個人経営へ：西シベリア、ヌムト湖周辺地域の脱集団化と複合的生業の現在」（鈴木・中村基金奨励研究員研究報告会）
- 9月11-12日「プラトンとロシア」研究会 坂庭淳史（早稲田大）「チュッチェフの詩におけるアイデアとカオス」；兎内勇津流（センター）「フィラレート（ドロズドフ）とツァーリたち」；杉浦秀一（北大・メディア・コミュニケーション研究院）「ゼンコフスキーのキリスト教哲学」；堀江広行（露日経済協議会）「S・N・ブルガーコフの『経済哲学』に見られる質料（マテリア）の積極性の評価について」；斎藤祥平（北大・院）「1930年代初頭のニコライ・トルバツコイの思想について」
- 9月26日 A. アルタイ（ゲミリョフ名称ユーラシア国立大、カザフスタン）“Казахская литература в XV-XVIII веках”、A. ババショフ（カラガンダ・ボラシャク大、カザフスタン）“Литература "Алаша" начала XX века”（センターセミナー：カザフ文学史）
- 10月12日 V. ソローキン「ロシア空間の形而上学：現代ロシア作家 ウラジーミル・ソローキンとの語り」（センターセミナー）
- 10月20日 ポーランドのアイヌ研究者 ビウスツキの仕事：白老における記念碑の除幕に寄せて（講演と合同セミナー）
- 10月26日 藤井得弘（北大・院）「中国初期探偵小説と科学技術」（ユーラシア表象研究会）
- 10月28日 O. マナエフ（ベラルーシ国立大、センター）“Ashes for the Spiteful Phoenix: Peculiarities of Belarusian Authoritarianism and Its Influence on Regime Dynamics in Russia and Ukraine”（センターセミナー）
- 嶋田紗千（世田谷美術館）「中世セルビア美術への誘い」（北海道スラブ研究会）

人事の動き

◆ 高橋沙奈美さんがセンター助教に就任 ◆

本年10月1日をもって高橋沙奈美さんがセンター助教に就任されました。高橋さんは京都大学大学院文学研究科で現代文化学を専攻され、修士課程修了後、北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専攻スラブ社会文化論専修博士課程で研究をおこないました。その後、日本学術振興会特別研究員（筑波大学）をへて今回の就任となりました。



高橋沙奈美さん

高橋さんの研究テーマは、20世紀以降の世界における宗教と宗教文化の役割や機能に関するもので、特にソ連期とそれ以降のロシア社会におけるロシア正教の位置づけに研究の軸を据えています。博士論文「ソヴィエト・ロシアの「聖」なる景観：後期社会主義ロシアの文化状況における正教的遺産の役割」（2011年）では、ソ連知識人にとっての宗教・精神文化、文化遺産としての教会建築に関するイデオロギーと権威言説、北ロシアの聖地群における宗教文化と博物館的文化などの諸点からこの問題を論じました。最近「聖地」と現代社会の関係をめぐる、ユネスコ世界遺産プロジェクトへの国や地元コミュニティの対応といった問題も論じています。

専門の関係でフィールドワークの経験も多く、留学先のヴラジーミルやモスクワ、北ロシアなどの専門家との間に、広いネットワークを持っています。また若手研究者同士の共同作業や、後進の学生との交流の場でも、積極的にリーダーシップをとってきました。助教にはセンターの研究活動の裏方役や、学生の指導役も期待されますが、いずれの方面でも適性満点と観察されます。研究者としての女性教員が長らく不在だったセンターにおいて、高橋さんの助教としての活躍は、女性研究員・院生への励みとなることが期待されます。[望月]

分かれたい意識：札幌での「学問」と「生活」

ジェーン・バーバンク(ニューヨーク大学／センター2013年度特任教授)



紋別岳の頂上で。

スラブ研究センターでの私の滞在はあまりにも短いものだったが、その半ばに私は、フェイスブックのサイトに2枚の写真をのせた。1つは、雲がかかった紋別山の頂上、もう片方は、モエレ沼公園のイサム・ノグチ設計のピラミッドに掛る太陽の光だ。私はそれらに「日本での幸せな生活の2コマ」というキャプションをつけた。すると、以前私の受け持っていた大学院生が、「ジェーン先生、少なくとも私には、もう少し説明をつけてほしいですね」と反応してきた。そこ

で私は、この短いエッセイで、どうして私がここにいる間幸せだったかを説明してみたい。

真っ先に挙げられるのは、ここでは学問的な創造性にとってあらゆる条件が満たされているということだ。それに精力さえ注ぎ込めば、そのまま生産性につながるだろう。だが私の考えでは、スラブ研究センターでのフェローシップは、どちらかという創造性のほうに向いている。今まで取り組んでいた課題をじっくり考える時間があるし、仲間から教えられた気になる論文について熟考したり、素敵な図書館の本を渉猟したり、eメールで送られていながらこれまで読む時間のなかった数々の論文を読んだりする時間があるのだ。本の執筆は

わずかしかなかったが、それぞれ異なる3つの部分を書いたので、自分の大枠の研究が——それは2冊の本になるはずだ——どのような進捗にあるかを測ることができた。こうしたことを可能にしてくれたのがスラブ研究センターであり、そのびっくりするほど素晴らしいスタッフ、図書館、教員と学生、訪問者、建物、そして北海道大学と札幌にあるという特別なロケーションなのだ。

私は、創造性と生産性の違いを、はっきりと区別したいわけではない。

むしろ、それらは一体となって働くものだ。とかく学者たちは、物事を対比させ、区分し、カテゴリーを考えた上で、人々や行動や文化をいくつかのタイプに分けて考えがちである——アジアと西洋、田舎と都会、職業的と属人的といった具合に。私が札幌で過ごした時間から得られたことの一つは、私がロシアの法や統治について書く上で、こうした分類に対して異議申し立てができるようになったということだ。嬉しいことに、私のインスピレーションの幾つかは、こうした区別が札幌での生活と同様に、決して峻別できるものではないというところから生まれたものだった。

研究や執筆をクリアにするというよりはむしろ曇らせてしまう分類については、「官僚的」支配と「属人的」支配の対比が、疑義を正すのに私のこの夏一番のお気に入りだったと言っている。私は、ロシア帝国の多くの地方で農民事情を監督していたとされるゼムスキー・ナチャーリニクの研究に取り組んでいた。以前カザンで調査していたとき、私は1909年に行われたゼムスキー・ナチャーリニクの査察文書を見つけた。SRCでの滞在によって、私は帝国統治の媒介者たちの査察結果を用いてデータベースを作り上げ、体系的にそれを眺める時間ができた。私はこれらの史料の目立った特徴を読み取るのに、ただ自分の印象に頼りたくはなかった。それをやり遂げるのには時間はかかったけれども、私は統計的なアプローチをとることによって、ゼムスキー・ナチャーリニクたちが自らの任務を果たす手際を、彼らの観察者の視点から見る事ができた。この内部査察は、他の役人たちが読むことを想定したものであり、査察官自らがどのように行政官の善し悪しを表そうとしていたのかということへの見識をもたらしてくれる。

国家の査察官たちにとって重要だと思われたのは、官僚的要素と属人的要素の両方だった。ゼムスキー・ナチャーリニクの査察で最も大事な項目は、記録をとること、町の様々な施設や官吏の監視、紛糾する土地改革の促進、仕事の速度や完璧さ、法律を適用する上での正確さ、そして地域経済の監督であった。しかし査察官たちは、これらの公務を行う官吏の属人的な資質にも留意していた。具体的には、彼らが自分たちの仕事に関心を持っているか、精神的であるか、どうしたら自分たちの仕事を改善できるかを学ぼうとしているか、といったことである。この査察を分析することによって、私はロシアの統治についてよく言われるような、独裁的だとか、無法だとか、後進的だとかいった神話に対して、異議申し立てできるようになっただけでなく、我々がウェーバーによる範疇をいかに誤って使っているかということを考えるようになった。つまり、その範疇とは、一方の近代的な官僚政治と、他方の属人化された古い体制権力といったような、はっきりと異なる2つの政治体制の様式を表すのではない。



モエレ沼公園で

統治は官僚的であるとともに属人的でありうるのだ。実際、役所を動かす「役人」(bureaucrat) なくして、どうして「役所」(bureau) がありえるだろうか。

このような考えをめぐらすことが、スラブ研究センターや札幌での生活とどう関係するのか？ 我々が日常の中の出来事を表現するのに決まって用いる二分法的な分け方が、他にもあるものだ。札幌で暮らしてみれば、東と西、田舎と都会といった分け方に、疑問を抱くようになるだろう。第一、東とは実際どこなのか？ いったいどうやったら、日本にいて方向感覚が得られるのか？ 特に、我々の多くがロシア帝国の研究をする上では、東や西といった方角の概念が使われるが、それらは別々の意味で用いられるし、それぞれに多様な意味が与えられている。しかし、学問でも日常生活でも、東と西という用語では説明がつかないというのが、私が札幌で強く感じたことだった。どこに行ってもクリエイティブな混合があったし、世界中のいたるところから洞察と発明の元が取り入れられていた。そこにあるのは、つながりであり、多様性であり、差異を楽しむことであり、伝統と革新を気軽に味わうことだった。着物も素敵なソックスも、それにたくさんのおいしい料理は言うまでもない——これらすべてが分類を拒み、すべてが多様な表現において日本文化に属しているのだ。

ロシアの歴史を研究する者としても、田舎で生まれ育った人間としても、田舎と都会という線引きは、長い間私をいらいらさせるものだった。おそらくそのことが、私が農民について書くことの一つの理由である。私は、農民が遅れた集団などではなく、個々の人間であるということを示したいのだ。札幌に来る前、私はニューヨークとパリに住んでいたが、どちらもそこに住んでいる人たちには、この最良の都会以外で人はどうして暮らしていけるのか信じられないといったようなところだった。この都会至上主義に対して、札幌で生活し、北海道大学のキャンパスで仕事したことは、私にとって最良の薬となった。というのも、ここ



フップシ
風不死岳の頂上で（筆者夫妻、兎内氏他）

では田舎と都市が混ざり合っていたのだ。トウモロコシが都会の裏庭で育っているのではないか！ 私は、外国人宿舎の脇にトマトを植え、収穫した。空気は春、夏、秋と、大地のふくよかな香りを運んでくれる。太陽の下で洗濯物が干せる。キャンパスには小川があって、畑があって、牛だっている！ ここでは田舎と都会、大学と農場が一つになって共存していて、そのことがロシア農民の研究をする歴史家の私、かつては畑と山の中で育つ少女だった私を、とても幸せにしてくれたのだ。

最後に、芸術とスポーツについて。札幌では人々が情熱を込めて一緒にしているもう一つの対がある。日常生活における美学と、Kitara コンサートホールや近代美術館のような公共建築におけるすばらしい美学とが、ともに同じ街にあり、一日に両方楽しむことすらできる。そこでは山登りだってできるのだ。膨大なコレクションを有するSRCの図書館司書の兎内さんは、私を印象に残る3つの山の頂上に案内してくれた。私は、札幌でマーラーやブリテンの曲の並はずれた演奏も聴いた。私は、火山がすっかり好きになってしまった。北海道の市民が生産し調理する食品の料理法や質の高さについては、あえて触れないでおこう。辺りに

雪がなくてスキーができなかったからといって、涙に暮れたりすまい。私は学生ランナーの群れをすり抜けて、自転車で家に帰る。そして、ここでは生活が幸福な多様性のもとに集まっていると思う。それは範疇に分けるものではない、ただ愛するだけだと。

(英語から植松正明訳、後藤正憲監修)

ニュアンスの妙：日本では足りなかったものと帰国後のモスクワで足りなくなるだろうもの話

イリヤ・ザイツェフ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所
／センター 2013 年度特任教授）

私と妻が日本へ行く準備をしていた時、こんな注意を受けた。「気を付けてください、向こうでは足りないものが山ほどあると思いますよ！」その「山ほど」という言葉から黒パン、塩漬けの脂身、ボルシチ、ジャガイモを添えた塩漬けニンジンなど東欧料理の選り抜きの品々に思い当たった。それで私たちは黒パン、塩漬けの脂身、ピーツその他を持ち込んだ。新千歳空港の税関職員が丁寧に洗ったピーツで作ったボルシチは私たちの食生活の孤独感を和らげてくれた。ピーツはくっついていたモスクワ郊外の土くれを残らず落とすために洗われたのだ。私たちが最初に驚いたのはこの時だった。



札幌芸術の森でカラスのブロンズ像と

札幌芸術の森でカラスのブロンズ像と



同時に滞在していたマナエフ氏（ベラルーシ）と
合った結果、これはイカやタコか魚だろうということに落ち着いた。これはトマトで色付けしたコンニャクだと後で（専門家の検証を経て）分かった。一度レストランで（そこには英

折に触れて私たちに足りなかったものといえば、それはやはり日本語である。例えば、私たちが醤油だと思って魚にかけて食べていた液体が、実は焼き肉のたれだった（実際その中にも醤油は入っていたけれど！）と滞在5ヵ月目に友人から聞いて初めて知った、とか。色つやのないムール貝に似た何か変てこな食べ物を買ったこともあった。ああだこうだとしばらく話し

語のメニューが無かった) 自動翻訳を使って食事を注文したこともあった。ウェイターが日本語で質問を書き、パソコンが英語に訳し、私たちが英語で答えを書き、パソコンがもう一度訳した。まあまあ夕食になった。

札幌に暮らして早くも5ヵ月が過ぎた。日本国内を多少なりとも旅行してまず分かったのは札幌が一番良い場所ということだ。周囲の人びとの物腰や笑顔といった点からも、気候や生活の便の点からもそう言える。そして次に、今になって実感しているのは、自分の国では、モスクワでは色々なものが足りないと思うだろうということだ。以下に添えた一覧が完璧だと言うつもりは毛頭ない。むしろこれは誰でも日本にいれば馴染んでしまうもののうちのごくわずかであるが、ロシアにいれば忘れてしまうものでもある。何より興味を誘うものは、ロシアにもあるが少し違うものである。足りなくなるのは次のようなものだ:

1. 自転車。モスクワには自転車が無いわけではない。もちろんある。しかしそれに乗って仕事に行くのは一般的ではない。また少し命知らずでもある。

2. 研究室の窓の下にあるコートから聞こえるテニス部員たちの叫び声(とくに女子部員の!)。

3. 図書館。いつでもすぐ近くにある。モスクワに図書館が無いわけではない。もしかすると幾つかのモスクワの図書館のほうが蔵書は多いだろう。しかし札幌では欲しい本との距離はずっと近い。

4. カラス。一度は自転車(1.を参照のこと)のかごから弁当を盗られ、あっという間にイカ焼きを一切れ持ち去られてしまった(それも手から直接!何とか振り払った)けれど、親しみがわくようになった。モスクワにもカラスはいる。しかしこれほど生意気ではない。その役回りを果たしているのは野良猫や野良犬だ。札幌には野良猫や野良犬は全くいない。

5. 温泉。モスクワには浴場がないわけではない。もちろんある。しかし温泉は一つもない。

6. 児童公園。もちろんモスクワにもある。しかし札幌の方が大きいし、公園自体の種類もより多い。

7. いつでも手助けしてくれる人々。例えば、道を尋ねる時(例えば相手も行き方を知らないとしても)。

一言でいえば、我が家の生活が、札幌以前と以後に分かれてしまったということだ。どうなるか見ものだ。

(ロシア語から千葉信人訳)

ヘルシンキにおける「ロシア近代化」ワークショップ 参加記

田畑伸一郎(センター)

9月12~13日にヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所(ロシア・東欧研究所)において、ロシアの近代化を日本やフィンランドと比較するワークショップが開かれた。英語でのタイトルは、“Modernities Scrutinized: Finland, Japan and Russia in Comparison”で、アレクサンテリ研究所、北海道大学ヘルシンキオフィス、在フィンランド日本大使館が共催した。資金面では、国際交流基金とロシア研究に対するフィンランドのCOEが主要な財源となった。このワークショップは、北海道大学のヘルシンキオフィスが昨年設立されたことから、ヘルシンキ大学と北海道大学の間、あるいはアレクサンテリ研究所とスラブ研究センターの間の研究協力を「制度化」する一環として、企画・準備されたものである。在フィンランド日本大使館からは、篠田研次大使が開会の挨拶をされ、ワークショップ前日には報告者を大使主

催の夕食会に招待いただくなど、全面的な支援が得られた。

会議では、6つのセッションで計16本の報告がなされた。報告者を国籍で分けるならば、フィンランド5人、日本4人、ロシア4人、スウェーデン、ノルウェー、イギリスが各1人であった。報告者の研究対象国で分けるならば、ロシア11人、フィンランド2人、日本2人、その他（理論研究）1人、ディシプリンで分けるならば、経済学9人、歴史学3人、社会学3人、哲学1人であった。

ワークショップのテーマは、上記COEがアレクサンテリ研究所を中心に行われており（代表者はマルク・キヴィネン所長）、そのテーマが“Choices of Russian Modernisation”であることで決められた。「近代化」の定義については、報告者の間で必ずしも統一が取られていたわけではない。現代ロシア研究者、なかでも経済研究者の多くは、近代化と言えば、ロシアの現政権、とくにメドヴェージェフ首相が推し進めようとするロシア経済の近代化を想起する。これは、ロシア経済の石油・ガスへの過度の依存を改め、製造業の発展を中心に、ロシア経済を根本的に改革するというものである。これがロシアの近代化に関するもっとも狭い解釈であり、イギリスのロシア経済研究の大御所、フィリップ・ハンソン氏の報告はこの解釈に従うもので、現在のロシアが直面する課題に関して報告された。



開会の挨拶を行う左から篠田大使、キヴィネン所長、筆者



ワークショップの1コマ

会議での報告の大半を占めたのは、19世紀後半くらいからの3カ国の経済発展を比較するものであった。19世紀後半には遅れていた3国（three latecomers or catching-up countries）が、どのようにしてキャッチ・アップしたのか、あるいは、し損なったのかが議論された。分析手法も、計量分析から制度や思想の分析まで、様々であった。日本とロシアの比較では、1860年代から1910年代頃までは共通性が多かったにもかかわらず、1960年代、70年代に大きく差がついた原因が議論され、日本とフィンランドの比較では、90年代以降、日本が足踏みし、フィンランドが先を進むようになった原因も議論された。

しかし、もっと大きな枠組みで近代化を議論するような報告も5～6本はあり、スウェーデンの著名な社会学者であるヨラン・タールボルン氏や、フィンランドの主導的なロシア経済研究者ベッカ・ステラ氏の報告などがこれに該当した。社会学者であるキヴィネン所長も、経済だけでなく、政治や文化を含めた広い枠組みで、会議の議論を総括した。

筆者自身は、この機会を利用して、過去2世紀にわたるロシアの国家財政統計を分析する試みを初めて行った。データは、一橋大学経済研究所を中心に行われてきたロシアの長期経済統計データベース作成プロジェクトのために収集してきたものである。日ロの比較が帝政期だけに限られるなど、会議のテーマに対して十分に貢献したとは思えないが、これまで筆者が行ってきたソ連期や現代ロシア期の財政分析をまとめるような報告ができたことには満足している。私の研究を知悉している上垣彰氏（西南学院大学）から、8月に一緒にロシア

を訪問した際に、「あなたもよくロシアの財政のことをいつまでも続けているね」と言われてしまったが、確かに性懲りもなく、このテーマだけは四半世紀ほどもやっていることになる。さらに脱線すれば、帝政期のロシア財政統計の一部は、今年2～3月のヘルシンキ滞在の際に妻とともに国立図書館で収集したものであった。ヘルシンキ国立図書館にロシア帝政期の資料が豊富に所蔵されていることはよく知られているが、その使いやすさには驚くばかりであった。

日本からは、上記データベース作成プロジェクトの代表者あるいは分担者であり、フィンランド銀行移行経済研究所の招待でヘルシンキに滞在していた久保庭真彰氏（一橋大学）と中村靖氏（横浜国立大学）、新進気鋭の日本経済史研究者の中林真幸氏（東京大学）が報告を行った。ロシアからは、旧知のウラジミール・ポポフ氏（ニューヨークの国連勤務）のほか、最近、北海道大学との間で大学間交流協定が締結されたサンクトペテルブルグ国立大学からナタリヤ・クズネツォワ氏、スラブ研究センターとの間で部局間交流協定を有するモスクワの東洋学研究所からイリーナ・レベデワ氏が招待された。

キヴィネン所長とは、今後もこのようなロシアをテーマとする会議を、日本とフィンランドの間で開いていくことについて意見の一致をみた。この背景には、フィンランドがヨーロッパにおけるロシア研究の中心地となっていることがある。ロシアの北極圏の発展に関わる研究についてアレクサンテリ研究所と共同で申請を行うなど、研究協力の「制度化」に関しては、かなりの進展が見られており、来年度も何らかの形でこのような国際会議を開くことができればよいと考えている。

（このワークショップについての英語サイトは、

<http://www.helsinki.fi/aleksanteri/english/news/events/2013/modernities.html>）

学 界 短 信

◆ 第5回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス開催される ◆



開成式で挨拶するグラム・ギル | CCEES 会長
と大会組織委員会委員長・藤本和貴夫・
大阪経済法科大学学長

のヨコタ村上孝之氏、そのほか組織委員は天理大学の五十嵐徳子氏、慶応大学の犬串敦氏、および私であった。

去る8月9～10日、第5回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスが、大阪経済法科大学で開催された。この催しは2008年2月にソウル大学でおこなわれた日中韓のスラブ研究全国組織（日本でいえばJCREES）のサミット決定に基づいて、東アジア諸国の持ち回りで開催されているものである。第1回（2009年）は札幌、第2回（2010年）はソウル、第3回（2011年）是北京、第4回（2012年）はコルカタで開催された。今回、開催国を一巡し、日本に戻ってきたものである。組織委員会の委員長は大阪経済法科大学の藤本和貴夫学長、事務局長は大阪大学の

本コンファレンスは、大阪経済法科大学の手厚い援助、京都・高野山などの観光名所を近隣に抱える大阪の地の利、また過去4回の東アジア・コンファレンスに比べれば準備期間が長く、Call for Proposals が適切な時期（2012年10月）に発表されたことなどから、過去最大の参加者に恵まれた。37のパネルが組織され、111名が報告した。出席者の総数は、153名であった。報告者の国別構成（国籍ではなく勤務国）は下記の通り。

日本——49、中国——15、韓国——8、ロシア——8、イギリス——5、カザフスタン——5、フィンランド——5、アメリカ——3、スウェーデン——3

そのほかモンゴル、カナダ、チェコ、フランス、ドイツ、ポーランド、ベラルーシ、オーストラリア、台湾、クルグズスタンから1名ずつが報告した。

開会式では、藤本和貴夫組織委員長、沼野充義 JCREES 代表幹事、グラーム・ギル ICCEES 会長、ナイル・ラティポフ在大阪ロシア総領事が挨拶し、ヨコタ村上事務局長から組織報告がおこなわれた。

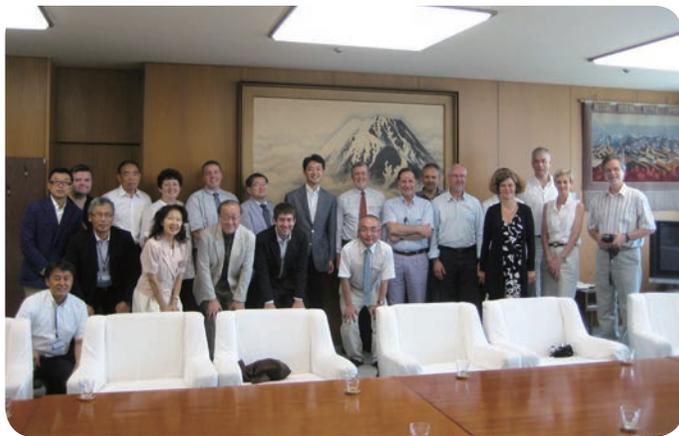
コンファレンスを記念する講演会が初日の夕刻におこなわれ、沼野充義東京大学教授、望月哲男北海道大学教授（センター）が、それぞれ、「カモメは宇宙に行き、春樹はサハリンに行く：ロシアと日本の間の越境と文化の相互作用」、「比較しがたいものの比較：ユーラシア地域大国比較プロジェクトから我々が学んだもの」という演題で講演した。

東アジア・コンファレンスが過去最大の規模で成功したことは、2年後に幕張でおこなわれる ICCEES 世界大会に向けての重要なステップとなるであろう。このコンファレンスのプログラムは、<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/text/2013OSAKAProgramLastall.pdf> で見ることができる。

なお、2014年のスラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスは、6月にソウルでおこなわれることが決まっている。Call for Proposals も近いうちにネット上で発表されるはずである。[松里]

◆ ICCEES の一連の会議について ◆

去る8月5～6日、幕張の神田外語大学において、ICCEESの執行委員会及びカウンスル会議がおこなわれた。その最大の使命は、2年後におこなわれる世界大会の主要会場である神田外語大学を視察し、世界大会の準備状況を点検することであったが、そのほかにもモンゴルの全国学会（The Mongolian Association of Central and East European Studies）の ICCEES 加盟承認、カザフスタンにおける



熊谷千葉市長と ICCEES 執行委員、各国学会代表、および世界大会組織委員

全国学会形成の状況など、重要案件が討議された（モンゴル加盟問題については、http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/text/Protocol_Ulaanbaatar2.pdf 参照）。

会議に付属して8月6日に開催された研究会では、越野剛、亀田真澄、長縄宣博、羽場久美子の4氏が報告した。

8月7日には、ICCEES幹部たちは、世界大会の支援者である熊谷俊人千葉市長を表敬訪問した。

8月8日には、ICCEES幹部の多くは、スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスに参加するため大阪に移動した。同日の夕刻には、グラーム・ギルICCEES会長、イリーナ・サンドミルスカヤ同副会長の参加のもとで第6回東アジア・スラブ研究全国組織サミットがおこなわれ、ICCEESに新規加盟したモンゴル学会（MACEES）が今後、東アジアのスラブ研究者コミュニティの一員として活動することなどを承認した。最大議題であった2014年の東アジア・コンファレンスの開催地選定は、有力候補地であった韓国学会（KASS）がサミットを欠席していたため決定には至らなかった。しかし、後に、KASSが強い開催意欲を表明したため、2014年のスラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスは、6月にソウルでおこなわれることになった。

なお、大阪での東アジア・コンファレンス直前というハードな日程であったにもかかわらずこれら行事をつつがなくこなすことができたのは、国際千葉コンベンション・ビューローと神田外語大学の支援協力があったからである。深謝したい。[松里]

◆ 学会カレンダー ◆

2013年11月21-24日 ASEES（スラブ東欧ユーラシア学会）年次大会 於ボストン

<http://aseees.org/convention.html>

12月12-13日 スラブ研究センター冬期国際シンポジウム

2015年8月3-8日 ICCEES第9回大会 於幕張 <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>

センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ 北樺太写真帖の由来判明する ◆



1919年5月、小樽棧橋にて。写真左が小林儀一郎技師、中央が植村癸巳男技師、右が池上隆技師

『北樺太生写真帖』という仮題のもと、センター図書室が2011年3月に古書市場から購入した写真アルバム3冊は、1919年、および1921年の北樺太における石油資源調査を記録したものです。どういう由来のものかは明らかではありませんでした。

今年度、京都大学地域研究統合情報センターの共同研究プログラムに「20世紀前半のサハリン島に関する

記憶」という研究課題を採択いただいたことを機会に、これを調べてみたところ、3冊ともすべて、農商工省の地質調査所が海軍省から受託した調査に参加した、植村癸巳男技師のものであることが判明しました。

植村技師は、1919年5-9月の油田調査では、第4班を指揮して東海岸北部のオハとエハビを調査、1921年6-9月の第2回調査では、西海岸に赴いた2班のうちのひとつを指揮して、ランガリーの油田、マガチ（写真帖では「マーチ」と表記）の炭田の調査にあたりました。

海軍省委託調査の結果は、『北樺太東海岸産油地調査報告』として、第1回は1921年、第2回は1926年に海軍省により出版されましたが、写真帖1冊目（1919年）の内容は、第1回の第4班の活動と符合します。また、2冊目と3冊目（1921年）も、同じく地質調査所の実施した第2回調査の植村班の活動と符合します。ただし、西海岸を調査した植村班の調査結果は、残念ながら報告書に含まれていません。

後年『地質ニュース』（166号、1968年）に植村が寄せた記事に付録の略歴によれば、氏は1893年東京市麹町区生まれ、1918年に東京帝大理科大学地質学科を卒業、翌年4月に地質調査所技師となったとあり、この仕事は、氏が就職まもないころのものだったということになります。

植村は、その後、1938年に学術振興会物理探鉱試験所常議員・研究員となり、翌1939年に中華鉱業股份有限公司取締役、1948年天然瓦斯技術協会専務理事等を経て、1967年には勲四等旭日章を授章したとのこと。その後のことは、まだ判明していません。

本写真帖は、日本と北樺太との関係を伝える貴重な記録として、活用を期待しております。
[兎内]

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第61号への投稿は8月末で締め切られました。現在、2014年春の発行を目指して査読・審査の作業をおこなっています。

『スラヴ研究』特集号のお知らせ

来年2014年は第一次世界大戦の開戦から100年、第二次世界大戦の開戦から75年に当たります。そこで『スラヴ研究』は、2015年春に発行される第62号のために、従来通り投稿を受け付けると同時に、特集への投稿を呼びかけることにしました。

テーマは「総力戦、その遺産と傷跡」です。

20世紀の戦争や組織的暴力は従来、ヨーロッパ史の中心性や冷戦の東西を暗黙の前提に議論が組み立てられていましたが、近年のスラヴ・ユーラシア研究は、そうした前提を覆す強力な成果を次々に世に送り出しています。また、第一次世界大戦後のネイションを単位とする国際秩序や第二次大戦後の脱植民地化の過程とその帰結は、帝国の崩壊と再編といった観点から見直しが進行しています。さらに、戦禍を被ったあらゆる地域と同様、旧ソ連・東欧地域でも戦争の遺産や記憶は絶えず政治化されてきただけでなく、創作活動の想像力を駆り立ててきましたが、これらを対象とする研究も枚挙に遑がありません。こうした研究動向に掉さしながら、総力戦自体はもとより、それがスラヴ・ユーラシアとその隣接地域の20世紀、そしてこんにちに及ぼした影響に関わる力作をお待ちしております。「隣接地域」に関しましては、『スラヴ研究』の性格上、その内部の動態を扱うよりも、旧ソ連・東欧との関係性を何らかの形で重視した論考が望まれます。

特集とはいえ、通常の投稿と同様の査読をおこないます。締め切りも、通常の投稿と同様、2014年8月末とします。[長縄]

会 議 (2013年8月～9月)

◆ センター協議員会 ◆

2013年度第3回 8月28日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

2013年度第4回 9月4日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

[事務係]

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース134号以降のセンター訪問者(客員、道央圏を除く)は以下の通りです(敬称略)。
[宇山/大須賀]

7月29日～Fredrick Cooper(ニューヨーク大、米国)、Marina Dmitrieva(極東連邦大、ロシア)、

8月3日 Klaus Dodds(ロンドン大、英国)、Paul Ganster(サンディエゴ州立大、米国)、Gayle Ganster、Lassi Heininen(ラップランド大、フィンランド)、Peter Hudson(デリー中国研究所、インド)、Robert Huebert(カルガリー大、カナダ)、Sergii Iegan(国家原子力規制院、ウクライナ)、Tomasz Kamusella(セント・アンドリュース大、英国)、Roman Khalenko(国家原子力規制院、ウクライナ)、Victor Konrad(カールトン大、カナダ)、Jussi Laine(東フィンランド大)、Luo Jing(中国社会科学院中国边疆史地研究中心、中国)、Alexander Maxwell(ヴィクトリア大、ニュージーランド)、Krishnendra Meena(ジャワハルラール・ネルー大、インド)、Joël Plouffe(州立行政学院、カナダ)、Paul Richardson(マンチェスター大、英国)、Tymur Sandrovich(京都大・院)、Alexander Sergunin(サンクトペテルブルグ国立大、ロシア)、Furugzod Usmonov(国家公務員資質向上研究所、タジキスタン)、Curt Woolhiser(ブランディーズ大、米国)、大石高典(京都大)、大西富士夫(日本大)、長田進(慶応大)、柏崎千佳子(慶応大)、川久保文紀(中央学院大)、川野眞治(同志社大)、齋藤久美子(和歌山大)、苑原俊明(大東文化大)、兵頭慎治(防衛研究所)、水谷裕佳(上智大)、吉村貴之(東京外国語大)

8月7-9日 市川克樹(株式会社オフィス・ブレーション代表)

8月11-12日 Henning Andersen(カリフォルニア大、英国)、Jadranka Gvozdanović(ハイデルベルグ大、ドイツ)、Bernd Heine(ケルン大、ドイツ)、Brian Joseph(オハイオ州立大、米国)、George Thomas(マックマスター大、カナダ)、Björn Wiemer(マインツ大、ドイツ)、Paul Wexler(テルアヴィヴ大、イスラエル)、菅井健太(東京外国語大・院)、醍醐龍馬(大阪大、院)、堤正典(神奈川大)、三谷恵子(京都大)

8月14日 黄立菲(中国社会科学院世界史研究所)、朱剑利(同)、王晓菊(同)

8月26日 岡野要(京都大学・院)

9月2日 安達大輔(日露青年交流センターフェロー)、大石侑香(首都大学東京・院)

9月3日 Andras Szasz(聖イシュトヴァーン大、ハンガリー)、村知稔三(青山学院女子短期大)、盛田常夫(立山R&Dヨーロッパ社社長)

9月6日 江畑冬生(新潟大)

- 9月9日 巽由樹子（東北大）
9月11-12日 坂庭淳史（早稲田大）、堀江広行（露日経済協議会）
10月4日 黒木英充（東京外国語大）、林行夫（京都大）、藤原辰史（京都大）
10月12日 Vladimir Sorokin（作家、ロシア）
10月20日 Krzysztof Jaraczewski（ユゼフ・ピウスツキ博物館、ポーランド）、Witold A. Kowalski（作家、ポーランド）、Cyril Kozaczewski（駐日ポーランド大使）、Alfred F. Majewicz（A. ミツキエヴィチ大、ポーランド）、Ewa Palasz-Rutkowska（ワルシャワ大、ポーランド）木村和保、山岸嵩
10月28日 嶋田紗千（世田谷美術館）

◆ 研究員消息 ◆

宇山智彦研究員は2013年8月2～8日の間、研究打合せ及び「欧州中央アジア学会大会」での研究報告のため、カザフスタンに出張。

山村理人研究員は8月16～20日の間、アムール川流域地方における農業の構造変動と中露農業関係に関する調査のため、中国に出張。

松里公孝研究員は8月19日～9月6日の間、現地調査及びフィールドワークのため、タタールスタン（ロシア）、ウクライナに出張。

越野剛研究員は9月5～14日の間、研究調査及び資料収集のため、ベラルーシ、ロシアに出張。また10月6～15日の間、第5回、第6回日露大学合同説明会出席及び資料収集のため、ロシアに出張。

岩下明裕研究員は9月8～11日の間、ワークショップ「Borders in Globalization」にて研究報告をおこなうため、カナダに出張。また、9月13～23日の間、国際会議「10th Annual Valdai Club Meeting」に出席のため、ロシアに出張。

野町素己研究員は9月16～27日の間、国際会議「Societas Linguistica Europaea」にて研究報告及び研究打合せのため、クロアチア、セルビアに出張。

望月哲男研究員は10月5～11日の間、学会「環太平洋諸国の対話におけるロシア語とロシア文化」出席のため、ロシアに出張。

田畑伸一郎研究員は10月5～12日の間、国際会議「The 3rd Meeting of Amur-Okhotsk Consortium 2013」出席及び沿海地方の持続的経済発展に関する資料収集・聞き取り調査のため、ロシアに出張。〔事務係〕



国際ワークショップ「ヨーロッパ言語地図の中の
スラヴ諸語」の後のエクスカーシヨンの様子
（にしん御殿）

目 次

共同利用・共同研究拠点中間評価で最高のS評価を受ける.....	1
新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」、 地域研究コンソーシアム研究企画賞を受賞.....	1
グローバル COE.....	2
GCOE・JIBSN 五島セミナー／ <i>Eurasia Border Review</i> 発行される	
研究の最前線.....	3
2013 年度冬期国際シンポジウム開催予定／国際ワークショップ「ヨーロッパ言語地図の中のスラヴ諸語：地域・類型論の諸問題」の開催／ホームカミングデー行事として活動報告会と公開講演会を開催／国立大学附置研究所・センター長会議第3部会のシンポジウムと会議を開催／2013 年度公開講座開かれる／アルタイ、ババシヨフ両氏の滞在／研究会活動	
人事の動き.....	9
高橋沙奈美さんがセンター助教に就任	
分かれたい意識：札幌での「学問」と「生活」by J. バーバンク.....	10
ニュアンスの妙 by I. ザイツェフ.....	13
ヘルシンキにおける「ロシア近代化」ワークショップ参加記 by 田畑伸一郎.....	14
学会短信.....	16
第5回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス開催される／ICCEES の一連の会議について／学会カレンダー	
図書室だより.....	18
北樺太写真帖の由来判明する	
編集室だより.....	19
『スラヴ研究』	
会議.....	20
センター協議委員会	
みせらねあ.....	20
人物往来／研究員消息	

2013 年 11 月 29 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	家田修
発行者	宇山智彦
発行所	北海道大学スラブ研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
